

図書館情報学科と私

竹村 彰 祐

Shosuke TAKEMURA

私は創設4年目に着任し、2000年3月まで図書館情報学科の歴史のほぼ前半を学科と共に過ごした。津田良成先生はじめ創設当時の先生方も多く亡くなられ、いつの間にか私は最長老になってしまった。創設当時の詳細は齊藤孝、岡澤和世、野添篤毅らの諸先生にまかせて、私は図書館情報学科の発展の歴史を辿りつつ、忘れかけた記憶を頼りに記すことにしよう。

名大から淑徳大へ

1988年1月は名大の定年直前で、研究に区切りをつけようとして忙しく、定年後の身の振り方は念頭になかった。そんなとき研究室に訪問客があった。愛知淑徳大学の鳥居大さんと小林春治さんと、4月から愛知淑徳大学へ来てくれとの唐突の申し出だった。私は仕事の内容も給料のことさえも聞かないで「ああ、いいですよ」と即答してしまった。どうせ教養科目でも受持つのだろうと思い、取り敢えずいいや、との気持ちだった。こんな人間もいるのかと、お二人は驚かれただろう。愛知淑徳大学が女子大のことぐらいは知っていたが。でもどうして私が定年間近と知ったのか不思議だった（後に中学で同期の富永伸君が学園理事をしていると知り、この線からなのかなと想像した）。3月末か4月初めだったかに星が丘キャンパスで任命式があり、そこで図書館情報学科に所属することを知った。ここで一緒に赴任する菅野育子先生に初めてお会いした。学科は司書を養成する為のものかなとか、コンピュータを導入して図書管理の効率化を計る為のものかなと想像はしたが、どうせ生物か化学を易しく教えればいだろうと思っていた。ただ校訓は私の学んだ中学（旧

制の愛知一中、今の旭丘高）に非常に似ていて女子大らしくないとは思った。でも親しみを感じたことだった（後に理事長の小林素三郎さんは愛知一中の先輩であり、学長の素文さんは旭丘高の後輩であると知った）。

津田先生にお会いした頃

その後レセプションがあって、学長さんから津田先生を初めて紹介された。とても親しみやすく話合いそうな方だという第一印象だった。1号館の2階に部屋を与えられて、淑徳での生活がはじまった。部屋は西の端から津田先生、大井正一先生、私、野崎六三先生……という順だったと記憶している。大井先生も時々私の部屋にみえたが、津田先生はもっと頻繁に來られて、実は情報に関する基礎から応用までを含む学科を作りたかったが、文系の大学では駄目と文部省に許可されなかったとか、コンピュータに関する技術と応用分野を情報科学と世間では言っているが、本当は情報とは一体は何かという理論的基礎とその応用を研究する学問を情報科学というべきとか、慶応義塾大学が図書館・情報学科と中ボチを入れている理由とか、様々なことを実に熱っぽく語られた。それで私は単に教養科目だけではなくて、生命の科学の面から情報そのものを掘り下げることを求められていると理解して、身の引き締まる思いがしたことだった。確かに図書館学は学術的に弱く、図書館情報学と名前を変えても、コンピュータを導入した単に新しい図書館学というのでは、学問的基礎が確立したことにならない。理論的な面から情報学の基礎を構築し、中身のある新しい分野の創出が必要と津田先生は感じておられ

た。私も同感で、生命の面から私なりに考え、遺伝情報系と言語情報系には強い類似性があると気付いた。そして生体情報から物質、エネルギー、情報の相関を考え、脳神経系の情報処理から情報の定量化の可能性を探ったり、情報力学の構築を試みかけたりしたが (S. TAKEMURA ; J. Lib. Inf. Sci. vol.10, 1997. p.1-17. & vol.12, 1998, p.27-42. S. TAKEMURA & M. NIWA ; ibid. vol.14, 2000, p.49-63. 竹村 彰祐 ; 情報知識学会誌, Vol.10, 2000, p. 2-27)、まさに浅学非才、いたずらに馬齢を重ねるのみだった。

こんなことがあった。津田先生は私の部屋に時々チョコレートを持ってきて下さった。気を遣って下さらなくてもと思い、あるとき次の様な話をした。私は以前に慢性膵炎を患い、医者に脂っこいものの食べ過ぎだ。何か思い当たらないかとしつこく尋ねられた。強いて言えばチョコレートぐらいかなと答えると、医者がそれに違いない、あれは99%が脂肪だからと云うので、私は病名を勝手にチョコレート性慢性膵炎、略してチョコ膵と名付けているとお話したら、先生はチョコ膵が気に入られたようなので、つい私も興に乗って、「先生、こんなのはどうですか。私がチョコ膵かチョコ膵かと呟きながら道を歩いていると、横丁のご隠居にばったり出会い、ご隠居が「チョコ膵とは何のことだい」と聞くので、件の話をしたら、ご隠居が「チョコレートはいけないね。あれはモーパッサンだよ」「えっ、もうばっさり？死にかけですか」「いやモーパッサンだよ、『脂肪の塊』(彼の代表作の一つ)だよ」と落語仕立てでお話したら、先生は非常に喜ばれ、これが逆効果で以後毎日「チョコ膵では駄目ですね」とチョコレートを見せびらかしながら、部屋に来られる様になった。他の先生方にもこの話をしてみたが、モーパッサンのところですぐに反応されたのは津田先生だけだった。先生も私と同様に大変チョコレートがお好きだった。

斉藤先生との思い出

私は着任すると間もなく都築先生からゴルフ部の顧問を頼まれ二年ほど勤めた。ゴルフは森林を広々と切り開いたコースでプレーする大変贅沢で勿体無いスポーツで、テニスコートなら何百面作れるかと思うと好きになれず、専らテニスコートで斉藤先生とプレーしていた。先生も私同様テニスが好きだった。するとテニス部部長の横山美津代君(当時国文3年生)からテニス部顧問になって欲しいと依頼された。渡りに舟と、部員とプレーできることを条件に引き受けた。

斉藤さんのプレーは物凄くパワフルで、悪く言えば無茶振りで、力を入れれば入れるほどラケットの振りが早く、左斜めにボールが飛ぶ。最初はその強打に戸惑ったがすぐに馴れ、彼が打つ直前に右に走り出して対抗した。やがて職員や院生で好きな連中を集めて同好会(メイプルテニスクラブ)をつくり、学長さんに優勝カップを寄贈してもらったりした。

情報科学教育センター長を兼務していた斉藤さんのテクノレディー養成と云うキャッチフレーズはとても新鮮に響いた。ただこれは単にコンピュータが扱える司書の養成と曲解される恐れもあり、他のキャッチフレーズも必要と考えたが思い付かなかった。また斉藤さんは文化情報学と応用情報学の二分野を学科の構想として提唱された。これはテクノレディー構想を補完して面白いと感じたが、新しい図書館学はどちらに入るのか、それらの中身はどうかと悩ましかった。

その頃(私の主任の期間の多分後半)村主朋英さんをまとめ役として学科の将来計画を先生方皆で盛んに考えた。津田先生は横軸に図書館学、縦軸に遺伝子から社会知識の形成、その中間に図書館情報学及びそれらの関連分野を整理して図示された(図1)。非常に良く出来ていた。成果はともかくとして、熱っぽく議論したあの頃が懐かしい。

斉藤さんからは沢山の著書を私の定年後にま

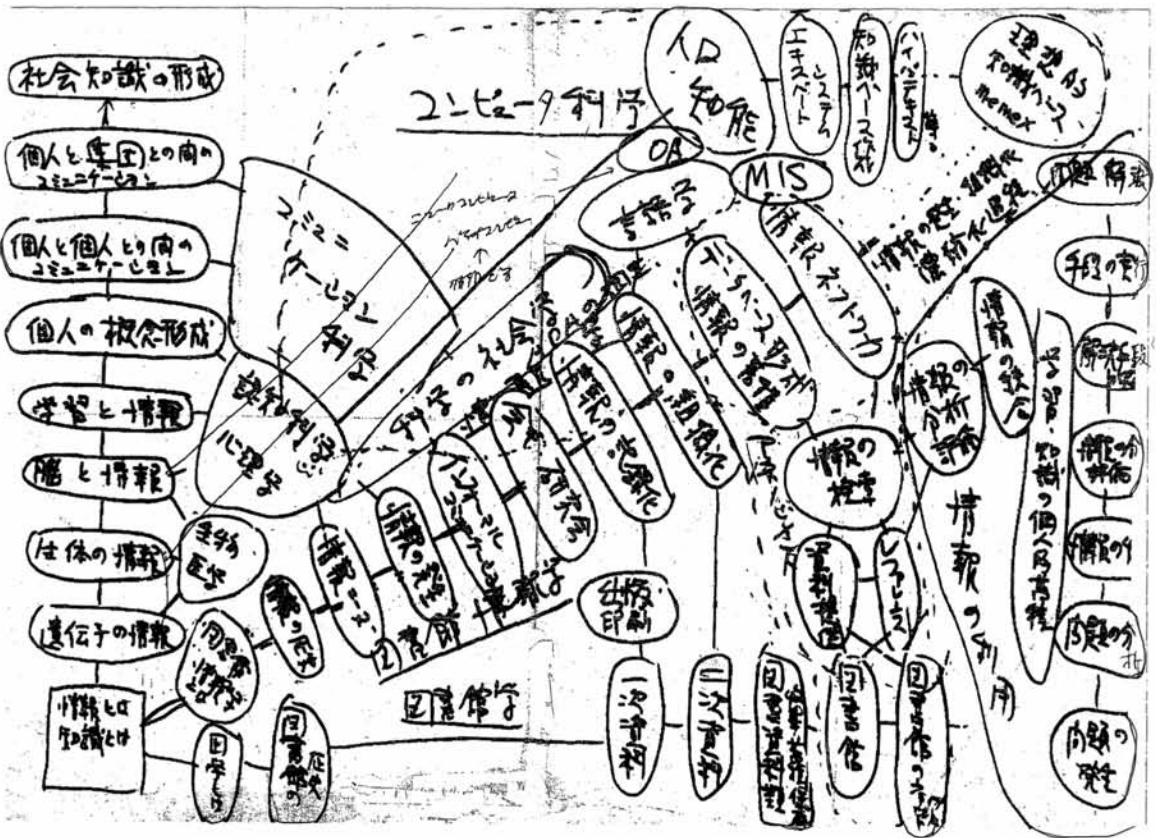


図1. 図書館情報学科関連の諸分野

* 津田先生自筆。当事配布されたコピーの再コピー

でも頂いた。2004年に出版された『「記録・情報・知識」の世界』の中で齊藤さんは〈わかる〉ことは〈分ける〉ことであると述べておられる。以下に氏への私の返事の一部を記す。「……こうして（私なりに）情報の基礎を考えるうちに、言語の意味は差異化によって生じ、情報の基盤には〈分類〉が関与している、つまり理解するということの基礎には分類がある、と思ひ至りました（J. Lib. Inf. Sci. vol. 14, 2000, p.49-63）。これはまさに齊藤さんの言われる〈わかる〉ことは〈分ける〉ことであり、〈分ける〉ことによって〈わかる〉のだと思います。この点で齊藤さんのお考えと何か一脈相通じるところがある……」。

学科主任になって

最初の主任は大井先生（1985-86）、次は津田先生で1987年から90年まで4年間勤められ、そ

の後を私に託そうとされた。もともと図書館学も情報学も専門外だった私はかなりためらい、余生を気楽に過ごす積もりでいたのに、他の先生方が何も仰らないので引き受けざるを得なかった。1991年から4年間勤めた。1995年-99年を野添先生が、2000年からは山崎茂明先生が引き継がれた。

新棟（研究棟）に引越したのはまだ津田先生の主任のときだったと思う。新しい居室を決めるのに皆さん遠慮しているので、私はためらいなく606号室を選んだ。そのわけは、性病の一種である梅毒の治療に用いた特効薬サルバルサンを昔は通称606号とよんでいたもので、誰もこの部屋は選ばなくて空室になるかもと咄嗟に思ったからだった。この薬の通称も津田先生しかご存じなく、私の空振りだった。妙なことを記憶しているものだ。

主任になって間もなくだったが、村主さんの

ゼミ生の後藤聖美さんが倒れて、一宮市民病院に入院した。私は村主さんと共に取り敢えず病院に駆けつけた。そのうちに意識は戻ったが記憶をかなり失って不自由な体になった。その後の様子が気になって、私は年賀状を出し続けた。何年か経って聖美さんから賀状が届く様になり、ホッとした。最初は一字か二字でとても読めず、母親の添え書きで様子を知った。遅々ではあるが少しづつ字が形になり回復具合がわかって嬉しかった。今でも賀状をやりとりしている。

主任の初年度に学生定員が1.5倍に増え、既に大学院も設置されていて事務量も増え、学生実習に先生の手が回らなくなってきた。それで実習助手の必要性を学長さんに訴えて、1993年に水野（現：加藤）陽子さん、翌年に草田（現：杉浦）直子さん、翌々年に岩井（現：鈴木）尚子さんのポストを得た。三人目の実習助手をお願いしたときは、さすがに学長さんほうんと仰らず、話し合いは物別れに終わったと思っていたが、翌春にポストが付いていて、聞き届けて下さっていたんだと知り、大変有り難かった。この年には津田先生を名誉教授に推薦した。翌年、野添先生が主任になられた年には図書館情報学科創立10周年記念講演会があり、前年からその準備の会合がしばしば開かれた。

私の講義に関連して

私は教養科目「生命の科学」と、専門科目「情報学Ⅰ（生物の情報システム）」とを受け持った。名大時代と比べるとノルマはかなりきつかったが、研究から教育に梶を切った私にはさほど苦にならなかった。「生命の科学」は最初の数年間で、専らプリントを使用した。図書館情報学科だけでなく英文学科や国文学科の1、2年生にも講義した。英文学科の学生はお喋りがひどく、少数の真面目な学生にはさぞ迷惑だっただろう。しかし私の教え方の未熟さも大いにあると反省したことだった。図書館情報学科の学生はさほど騒がず、真面目な学生が多かった。専門科目では生物を情報の面から解説するのに

適当な書物やテキストがなく、赴任の最初の1年余りは教科書の原稿作りにかかった。文系の学生には少々難解かも知れないので、理解しやすい様に苦心した。講談社サイエンティフィックから「生物の情報システム」として1990年春に出版され、どうやら講義に間に合った。この本は割合に評判がよく、いくつかの大学で教科書として使われ、多少の印税が10年を超えて入ってきた。97年には内容をかなり新しくした新版を出した（現在は廃刊）。

講義は主にOHPと板書を用い、レベルを下げずに理解して貰えるように腐心した。自分も知らない分野が多く、学生と共に学ぶことが出来て幸いだった。時には机の間を歩き回り、ジョークも交えた。いつジョークが出るかと聞き耳を立てると自然に講義が耳に入る。今は遺伝子だのDNA診断だのと新聞紙上にもよく出てくるので、私の講義は日常の生活に役立っているだろう。講義の他に実習「図書館情報学特殊演習」も受け持った。

講義に関連してこんなこともした。1990-92年には4年前期終了後希望者を募り、名古屋大学臨界実験所（三重県菅島）の所長の林博司先生に頼み、1泊2日の泊り込みでウニの発生を実験観察させた。実験所に来る名大大学院生とあわよくばカップルができるかもと期待したが、当時は私の耳に入らず、かなり後に一組できて仲良く暮らしていると知った。林さんは後に堀田康雄先生を挟んで私の後任になった。

ゼミ合宿と卒論（竹村ゼミを中心に）

赴任した翌年（1989年度、2期生）からゼミ生を持った。ゼミの目的は卒業論文作成の指導で、先ず論文とはどういうもので、何故論文は必要か、論文の構成内容等を説明し、その後卒論の題目を考えてもらった。テーマに必要な論文を検索し取捨選択して収集、内容を理解して論文を構成するのに役立ち、かつ自然科学系ならどんなテーマでも一応良しとした。勿論私の未知の分野も多かったので、認めると同時に、

ゼミ生に知識を提供する為に彼女等に負けないで多種多様な書を読みあさった。それはまた私にとって広く勉強する良い機会でもあった。やがて学生数の増加で先生方の卒論指導の負担が大きくなり、1994年には3年生の夏休み前に卒論か特殊演習(二科目)かの何れかを選択することになった。志望に偏りが多くて人数の調整に苦労した。3年後期は卒論のテーマを決めて文献を収集し、4年前期には章立てとその内容の概要が出来ないと卒業に間に合わない。卒論の進捗状況を把握し、問題点を整理してその作成を助ける目的で、主として4年の夏休みが終わった直後にゼミ合宿をして卒論の中間発表を行った。

1989年9月7、8日に津田先生と菅野先生に誘われて3ゼミ合同で行ったのが最初のゼミ合宿と思う。私は初めての経験で見学の積りだった(表1参照)。翌90年私は合宿の効果を確か

めようと単独で行った。ゼミ生が決めたトヨタの研修所(浜名湖北の丘上)で行った。初日はゼミ生の車に同乗したが生憎雨で、東名高速を140kmで飛ばされ、スリップしそうで怖かった。以後事故予防の為ゼミ生には車を使わず、公共の乗り物を使うことにした。その直後菅野ゼミに誘われ箱根仙石原に行き、女子の取り扱い方を少々学んだ。

翌91年から本格的に合同ゼミ合宿が始まった。加賀山代荘(国家公務員共済組合宿舎)は畳がボロボロで臭くて閉口した。ゼミを合同ですれば他のゼミの進捗状況と卒論内容を互いに比較でき、教員にもゼミ生にも大いに役立った。

合同ゼミは参加者数が多くなり、93年度からは実習助手がOHPや投影スクリーンを運び込んで運営をサポートしてくれて大いに助かった。94年から竹村ゼミは3年ゼミ生も自由参加にした。「男女の生み分け」の発表では両性の接し

表1. ゼミ合宿(卒論中間発表会)。竹村関係分のみ。

実施年月日	参加ゼミ	他の参加者(院生、実習助手等)	実施場所
1989-9/7,8	津田, 菅野, 竹村		不明(淑友館?学内?)
1990-8/28	竹村ゼミ単独		トヨタ研修所
〃 9/7-9	菅野ゼミ単独	竹村	箱根仙石原サンテラス
1991-9/10-12	逸村, 村主	竹村	軽井沢ホテルエクシブ
〃 9/16-18	津田, 菅野, 竹村		熊野灘レクリエーションホテル
1992-9/1-3	津田, 竹村	村主	加賀山代荘(国家公務員共済)
〃 9/9-11	菅野, 逸村, 村主	竹村	熊野灘レクリエーションホテル
1993-9/1-3	逸村ゼミ単独	竹村, 村主, 原田(慶大)	ホテルエクシブ鳥羽
〃 9/8-10	菅野, 村主	竹村, 逸村, 村主	淑友館
〃 9/14-16	津田, 竹村 ^{*1}	逸村, 村主, 菅野, 三輪, 水野	志摩合歓の郷アネックスイン
1994-9/7-9	逸村, 菅野, 村主 ^{*2}	竹村, 原田, 水野, 草田, 院生	岐阜県ギャラクシーホテル
〃 9/12-14	竹村ゼミ単独 ^{*3}	逸村, 水野, 草田, 渡辺	浜名湖レークサイドプラザ
1995-9/11-13	竹村, 野添	草田, 岩井, 渡辺, 久野	湖西市グランドホテル湖西
1996-3/4-6	逸村ゼミ単独 ^{*4}	竹村, 久野, 広田, 山西, 四谷, 水野, 草田, 岩井	ホテルエクシブ鳥羽アネックス
〃 9/9-11	野添, 竹村	草田, 久野	福井県三国町ポートヒル芳泉
1997-9/11-13	竹村, 野添 ^{*5}	久野, 水野, 草田, 岩井	浜名湖レークサイドプラザ
1998-9/17,18	竹村, 菅野	水野, 岩井	浜名湖レークサイドプラザ
〃 9/25	全ゼミ生合同	他学科の学生も聴講可能で行う	学内 721, 722教室同時開催
1999-9/23,24	竹村, 野添, 堀田, 山崎	水野, 杉浦, 岩井	浜名湖レークサイドプラザ

*1 この時から実習助手が手伝う(投影機材の運搬、設営等)。*2 院生の有志が参加し始める。

*3 3年ゼミ生の自由参加が始まる。*4 3年特殊演習のゼミ生自由参加。*5 3,4年特殊演習ゼミ生自由参加。

方の少々デリケートなことにゼミ生が言及し（真面目にである）、逸村裕先生が赤面したのを懐かしく思い出す。中休みか終了後かにテニスコートを2時間程借り切って楽しんだ。98年度は全ゼミ合同も試み、学内721と722の隣り合った二教室で、他の学科の学生も自由に参加できる形で行なった。

名大の理系ではごく当然のように卒論発表会を公開で行っていた。ゼミの先生自身が自分のゼミ生の卒論の合否を決めては、自ゼミ内ばかりか他ゼミとの間に不平等を生む恐れがある。津田先生は発表会をすることにすぐ賛同してくれた。1991年1月下旬には津田ゼミと竹村ゼミが発表会をそれぞれ単独で行ない、終了後両ゼミ合同で学内で打ち上げコンパをしたことを思い出す（表2）。

93年からは卒論の合同発表会が本格的に始まった。津田ゼミの原木（現小林）晴子さんは「bookwormの駆除とその薬剤の副作用」について話された。先生方の質問が済んでから、私は「貴女は本を読むのがお好きですか」と尋ね

た。彼女は真面目に「ハイ、好きです」。そこで私は「それでは貴女も本の虫なんだ」と返した。彼女に最近会ったが、今でも駆除されないで健在である。94年からは全ゼミ合同になり、ECホールNとS両室の会場で同時に開催した。聞きたい発表を逃すまいと両会場を行ったり来たりした。96年にはそれに野添ゼミの特殊演習1件2名が加わり、98年は野添、竹村ゼミから各1件加わり演習室でデモンストレーションも行なった。99年は菅野、竹村両特演ゼミ、2000年は菅野、竹村、山崎各特演ゼミも加わった。

以下に竹村ゼミの卒論テーマを少々挙げてその多様さを示しておこう。

- ・「遺伝子構造と機能の検索プログラム」（1991年度）。幼稚なBASIC言語で作成。
- ・「ダウン症の発生要因と出生前診断の現状について」（1992年度）。羊水穿刺法も記載。
- ・「生命の自己組織化（秩序の形成）」（1993年度）。生物の構造形成の理論的展開。
- ・「放射線の人体に及ぼす影響について（もし名古屋に核爆弾が落とされたら）」（1994年度）。

表2. 卒業論文発表会

実施年月日	発表者及び参加者	実施場所
1990-1月下旬	竹村ゼミ単独、全員参加全員発表（1人10分）。	学内 331教室
1991-1/24	全 上 （1人15分）。	学内 133教室
1992-1/28	全 上 ”	学内 622教室
3/23	津田、菅野両ゼミ一部発表（1人30分）。両ゼミ全員、竹村、村主参加	中村区日赤東の大観荘
1993-1.19,20	津田、竹村両ゼミ全員発表（1人10分）。両ゼミ全員、先生自由参加	学内 ECホールN
1994-1/25,26	全ゼミ合同全員発表（1人6分）。3年生全員と先生全員参加、他学科の学生にも開放。	学内 ECホールN, S同時
1995-1/24,25	全ゼミ合同全員発表（1人6分）。3年生全員と先生全員参加、他学科の学生にも開放。	学内 ECホールN, S同時
1996-1/25	全ゼミ合同全員と野添特殊演習ゼミより2名発表（1人6分）。3年生全員、先生全員、他学科学生にも開放。	学内 ECホールN, S同時 演習室も使用
1997-1/24	全ゼミ合同全員発表（1人6分）。3年生全員と先生全員参加、他学科の学生にも開放。	学内 ECホールN, S同時
1998-2/5	全ゼミ合同全員（1人6分）と野添・竹村両特殊演習ゼミ各1件発表（1人15分）。3年生全員、先生全員、他学科学生にも開放。	学内 ECホールN, S同時 演習室も使用
1999-1/29	全ゼミ合同全員（1人6分）と竹村・菅野両特殊演習ゼミ各1件発表（1人15分）。3年生全員、先生全員、他学科学生にも開放。	学内 ECホールN, S同時
2000-1/28	全ゼミ合同全員（1人6分）と竹村・菅野・山崎特殊演習ゼミ各1件発表（1人15分）。3年生全員、先生全員、他学科学生にも開放。	学内 ECホールN, S同時

放射性同位元素と放射線の種類、その人体への影響、名古屋上空での核爆発による熱線、爆風、風速と風向を考慮した放射性降下物による被害の大きさとその及ぶ範囲を計算で推定している。福島原発事故の被害範囲の推定が遅くて問題になったが、文系のゼミ生でさえ16年も前に試算が可能で、被害は長円形に広範囲に広がることを示している。

- ・「意識は脳のどこにあるか」(1995年度)。
- ・「古代のDNA試料から見た生物進化」(1996年度)。
- ・「宇宙環境(人類が宇宙で生活するには)」(1997年度)。

大学院創設とその後の展開

1989年には図書館情報学専攻博士前期課程、91年度に後期課程が設置された。津田先生の並々ならぬご尽力の賜物だと思っている。大学院では何を研究し如何に指導するか、院生は勿論のこと何人かの先生方に最初は戸惑いが見られた。逆に図書館関係は素人同然の私もどう指導したものかかなり迷ったが、情報学の構築を目指して研究指導することにした。図書館に関連するテーマの中には、これが大学院で研究することかなと思うものもあったが、最初は心許なかった院生も数年経つと次第に院生らしくなった。その変化に私は励まされた。

学位取得に必要な学位論文の作成には、研究目的(明らかにしたい事項とその理由、必要性、新しさ。それが明確でないとテーマは決まらない)、用いる方法とその是非(正当性の検証)、得られた結果の説明、結論、考察を厳密に進め、それを権威ある学術雑誌に発表する必要がある。多くの院生は目的の新しさや方法論で引っかかってしまう。

他の一つの問題として、最初の頃は先生方が学位を持たず、院生の研究を学位レベルで評価して学位取得の指導をするのに積極的になれない様に思われた。そこで先ず先生方が学位取得を経験する必要があると感じた。野添先生の様

に既に優れた論文を多数発表されていて大学院のこともよく理解しておられるのに、頑固に学位を取得しない方もあるが、研究論文評価の諸問題で非常に優れたお仕事をされている山崎先生に先ず学位取得を勧めた。定年間近だった私は審査委員(副査)として関与し、私の退職後間もなく取得された。

やがて院生の中にも良い論文の出来そうな人が出てきた。たとえば高木美保さんには論文をまとめる様に勧めたが・仕事に追われたりして機会を失った。研究結果をまとめて学位論文に仕立て上げる要領も必要である。私の知る院生の中で唯一学位を取得し教員として働いている伊藤真理さんのように、新しく衣替えする人間情報学部でも教員として十分通用する人物は他にもいるのに残念に思った。山西(増井)史子さんも誰に(もしかしたら出身学科の先生に?)遠慮したのか、学位論文を作成しなかった一人だ。

文学部長の頃

学部長は学長さんが兼務していたが、1997年から教員の選挙で選出することになった。突然のことで、わが大学も民主化しはじめたかと思っただが、多分学長さんの頭には学部を増やす構想があって、学部長の兼務は無理になるとの読みがあったのだろう。私は理学部出身だからまさか自分が選出されるとは夢にも思わず、まさに青天の霹靂だった。国文学科や英文学科やコミュニケーション学科まで面倒を見る自信など全くなく、辞退する積りで、学長さんに少し考える時間を貰った。ところが直後にインフルエンザに罹り、いたずらに時が過ぎて次の教授会が来てしまった。選ばれた事実は重く受け止めないと選挙の意味を否定することになると思い、やむを得ず引き受け、学部長室に引っ越した。セクハラなどの思い掛けない事件もあったが、どうやら2期4年間勤めて定年を迎えた。

終わりに

1995年度から男女共学になった。男子学生は女子に押されて影が薄い印象だった。現在はどうか。2001年6月に逸村さんの発案とご努力で、学科の同窓会が催された。懐かし思い出である。同窓会は今どうなっているのだろう。

この歳（卒寿が近い）になっても、私のゼミ生や他の先生のゼミ生だった方達や、卒業後大学に勤務している方々に、食事に誘われたりしてお付き合いをしている。また時には街で思い掛けなく声をかけた下さる卒業生の方がある。つい先日は英文学科の大野光子先生も声をかけて下さった。懐かしく嬉しい限りである。

来年で新しく人間情報学部に移行して図書館情報学科が無くなるとのこと。少々淋しい気もするが、新学部は津田先生や私の描いていた理想にやや近づくのではなかろうかと思っている。あれやこれやと思い出すときりがないので、この辺りで筆を置く。